

2004年7月15日 発行

2004年夏号

<第1号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/山川宗計 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 E-mail: union@h9.dion.ne.jp

共に働く

―事業所特集(一)―、ワークス和(なごみ)

今から六年前の四月、彼らが属していた施設の機関紙に、発足したばかりの「ワークス和(当時名・ワークス田積)」が特集で紹介されました。この写真は、その時の表紙のリメイクです。当時のメンバーの数は職員を含めて九名、現在はちょうど倍の十八名。仕事場の階段の上りかまちに、全員が顔を揃えられたのに、今は半分だけ。創刊第一号は、この事業所の現代の素顔を紹介します。

私のチャレンジ

私は、六月一日からサンメンテナンスという会社に就職して、大阪市医療センターという病院の中で、掃除の仕事をしています。

私は、ワークス翔で掃除の仕事をしてきたし、エルチャレンジの掃除もして、少しずつ掃除の仕事覚えてきたんです。

仕事は朝が早いんで、体は、めっちゃしんどいです。毎朝五時に起きてるけど、母は四時に起きてくれて、私のためにお弁当を作ってくれています。

仕事は、めちゃくちゃ難しいんです。厳しいこともいっぱいあるけど、会社の人は、ていねいに教えてくれます。

今は、お風呂掃除を汗だくになりながらやっていきます。早く給料日がこーへんかなーと楽しみにしています。

谷口 佳奈

ワークス和の一日

ワークス和は、一九九八年四月一日に「ワークス田積」として開所した、ユニオンで最も古い事業所の一つです。

現在の利用者は十五名、職員三名です。利用者は、男十二名、女三名と圧倒的に男が多く、比較的自閉的傾向の利用者が多いのが特徴です。就業時間は午前九時から午後四時十分までです。午前中に(株)田積製作所のアジャスター(高さ調整ネジ)を組み立てたり、ピスの袋入れをして、午後からサンワ(株)のハンガーのウレタン掛けをしています。

「集まって下さうい。朝礼を始めます。おはようございま〜す。」日直さんの声です。日直当番の仕事というのには主に朝礼・終礼を行うことです。誰がどの仕事に取り組むのか、日直当番の人からみんなに伝えます。そして、朝礼の最後に「今日も一日がんばりましょう。」とみんなで唱和したら、和の一日の始まりです。

仕事に一生懸命取り組む人、おしゃべりや居眠りをしてしまう人、いろいろな人がいます。そのような時、仲間同士で注意をできるよ

うな雰囲気や和にはあるのです。仕事を少しさぼってウロウロしている人がいました。「仕事やろ！早く戻っておいで。」と注意の声を飛びます。その注意に対して「ニヤ〜猫です。」という答えが返ってきました。注意をした彼女はあつけないとられていましたが、結局彼は仕事に戻りました。言葉だけではない彼らの信頼関係がきつとあるの

でしよう。職員は見守っていただけでした。「ワーワーもう仕事をやめて帰る！」突然怒鳴り声が

しました。みんなはその声に驚いたり、注意をしたり、何もなかったかのように仕事を続けていたり、怖くなくてトイレに隠れたり、反応は様々です。すると次の瞬間大きな音が「ガシャーン！」椅子を床に投げつける音です。どうしてこのような行為になつてしまうのでしょうか？混乱をした彼が見られます。自閉傾向がある彼にしたら、突然の仕事の変更、彼の予定になつたことが起きてしまうこと

椅子の解体を始めました。みんなは「何をやる気や？」という顔をしていました。投げた彼も「返せ！」必死で抵抗しました。その後、椅子を投げることはなくなりました。なぜ投げてはダメなのか？そこをどうも彼が感じてくれればと思つています。でもこんなことばかりではないのですよ。「立つんだー立ち上がれ！」以前、仕事ができずに、うずくまっていた人がいました。職員が何度となく声をかけていると、それを見ていた人が、仕事を中断し、彼を迎えにきたので

しかし彼は立ち上がりません。「ダメだったのか？」と言いなながらも、もう一度チャレンジします。今度は抱えあげ「仕事にもどるんだ！」と言いなから、彼を仕事場に連れて行きました。その姿はとも自然で「仲間だろ。」と言っているように見えた瞬間でした。対話をするのが難しい中でも「仲間」という意識、そして彼らなりの表現があるのだらうと感じました。

和では、みんなが満足して一日を終えることができるように、少しの時間であっても、希望する仕事に携わってもらうようにしています。また、みんなの中に「私はまだ仕事ができる。企業の仕事をまかされている。」というプライドを大切にしています。

みんなが充実した毎日を通すことができる支援とは…。職員も日々、発見、悩み、考える毎日です。

(山口・宮崎)

三者の始まり(一)

— それぞれの思いと焦り

ワークスユニオンは設立から七年目を迎え、利用者八十五名、支援者二十二名の太所帯になりました。それがどのようにして始まったのか、設立に関つた人たちの話をもとに、三回にわたってお伝えします。

「ワークスユニオンはどうして始まったのか」なんて、いまさら思い返すのも面倒なほど、それは遠い昔の話のように思えます。でも、機関紙の創刊号だし、後々のことでもありますから、大筋だけここに書き留めておきます。それでは——。

まず、始まりには、(利用する本人・親御さん・支援する職員)の三者三様に、それぞれ異なる思いと焦りがあつたようです。

本人たちは、それまで企業就労訓練施設にいて、明けても暮れても就職を目指してガンバリ続けていました。しかし五年が過ぎても、会社の門は遠く、思うようには進めない。またある人は、一度は

親御さんたちにも焦りがあつたでしょう。その頃所属していた法人は、施設在籍は五年までという有期限制を新たに実施しようとしていました。「またこの予らは、施設をたらい回しにされることになるわ。働ける間だけでも、ずっと安心して通える場所を、自分らで作られへんもんやろか。」

百二十一名に上り、利用者は八十五名を数えます。

三者三様の、以上のような思いと焦りが重なり合つて、ユニオンの作業所が誕生しました。これが社会福祉法人化され、小規模通所授産施設となり、地域生活支援の拠点となる、多数のグループホームを併設するのは、三年後の二〇〇一年のことです。

会社に入ったけれど、いろんなことがあつて、出てきてしまった。そんな悔しい思いと焦りから、彼らなりに、次の出口を探していたようです。彼らは、あちこちの企業の場を借りて実習を繰り返していましたから、施設の外で働くのは慣れていたし、むしろそれを好んでもいました。そこで、「会社の場を借りて自分たちの仕事場を作る」というユニオン式の作業施設の始まりは、給料は低くても彼らには願つたり適つたりだったのに違いありません。当初は、彼らの意気込みを買つて、仕事場の呼名は、例えば(榎田積製作所の作業所

支援者たちは、利用者の企業就職と定着に血道を上げていました。誰かが上手く行く筈はないことを端から承知していました。むしろ、就職しようとする過程に、人が成熟する価値を見ていましたから、出来なかつた場合の受け皿作りに、万全の力を注いでおかなければならなかつたのです。まして、期限が来たから見放すという無策だけには終わりにしたくなかつた。しかし五年の期限を過ぎて、行く場を持たない人たちが増え、支援者たちの見識と力量が改めて厳しく問われていました。

利用者たちは、一般の工場に、グループ実習の形で職員と長期間働いた経験と実績を持つていました。ユニオンの作業所はこの方法を取り入れることにしたのです。早速、グループ実習で懇意の間柄にあつた二つの企業、(榎田積製作所(現・ワークス)と(株)トス(現・ワークス

歩)が場所の提供を快諾してくれました。(続く、山川)

お伝えしましょう。立ち上がりのときの数の多さはやはり有力な武器になります。ユニオンは利用者百名に限っています。年六月現在、保護者の会員は

その時だけに終わらない、生涯にわたる支援を試みたい、支援者であれば誰でも、そう思うでしょう。ワークスユニオンは、利用者の必要に応じて動くサービス機関ではありません。必要なときに必要だけ応えるのではなく、果てしなく人生の終わりを

まで関わりを続けます。

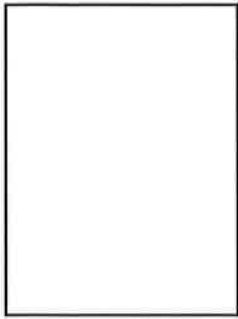
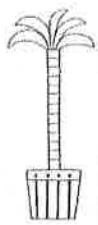
「短期自立生活体験」へのお誘い

～旅行・一人暮らしの気分です～

みなさん、旅行は好きですか？毎日の生活を送る中で、いつもと違う場所であつと生活をしてみたいと思いませんか？旅行気分・一人暮らしを体験するーそんな気分に参加できるのが「短期自立生活体験」です。

「短期自立生活体験」の生活をのぞいてみましょう。四泊五日の間には、生活に關するプログラム(洗濯、整理整頓、掃除など)ばかりではありません。グループホームで生活をしている利用者さんとゆつくりお話をする機会がきたり、新しく他の利用者さんとお出会う機会もあります。他にも、「短期自立生活体験」の中で、ボウリングやカラオケ等の個人活動を取り入れてガイドヘルパーと余暇を楽しんでいる人もいます。一人で過ごす時間の使い方や楽しみを、職員と一緒に見つけていきましよう。

まずは、旅行気分・一人



暮らし気分を利用してみて下さい。新しい生活の第一歩には不安がつきものですが、近くには職員がいつもいます。一年後、ちよつと成長したあなたに出会えるでしょう。今まで出来なかつたことが出来るようになる自立に向けた場であり、普段出来ないことが体験できる場なのです。(牧野)

職員紹介

「ワークス和」はワークスユニオンの事業所の中で唯一、二人の職員を持ちます。二人ではなく三人だからこそ、それぞれの持ち味が生きている、そんな三者三様の和職員を紹介します。

～を食べる時のようです。

山口一恵

向日葵のような笑顔で、芸人顔負けのトークを繰り広げる彼女の周りには、自然と人が寄ってきます。彼女は和を昔から知る人でもあり、想いは半端ではありません。十年後、自転車に子どもを乗せて、大根を値切つた後は、やつぱり和へ向かつていそうです。

鳥居隆史

この春ユニオンに来た彼女は、人生経験豊富な頼れる三十四歳です。また、尾崎豊をこよなく愛する、熱い男でもあります。豊富な引出しですぐに和に溶け込み、軽快な動きで若々しさを感じさせます。実は細かい作業が苦手だとか、苦い経験から占いだけは信じられないとか、まだまだ彼の魅力は奥深いようです。(中谷・内田)

編集後記

私事ですが、もうすぐ三歳になる娘を見て、考える事があります。

小さいながらも毎日新しい物と出会い、発見し学んでいるようです。楽しいこと以上に辛いことも感じ始めています。この先、大人になっていくうちに、多くの苦勞も体験すると思います。

でも、その時、私は何が出来るのかと？

親は子どもの苦勞を代わつてあげられません。ただ暖かく見守っているぐらいの存在です。でも、助けて欲しいと手を出した時、さつと手を差し出す必要があります。だからこそ、その手を常に周りの誰かが持っているかが、子どもにとつてどれだけの安心をもたらずかと思えます。

ユニオンの利用者にとつてユニオンが「支える」手になれるかどうか、その「支える」という一番難しいものが何なのか、ユニオンもこれから試行錯誤の道が始まるのだと思えます。

(荒木)